発行所
津奈木公民館
芦北郡津奈木町
電話(78)3111㈹
印刷所　旭印刷
電話(水俣)㊗4101番

津奈木

今後の文化活動について

津奈木町長　西川　裕

職員に迎えられ初登庁の西川町長

二十一世紀を迎える迄に、後六年余り、正に激動の世紀末の様相を呈している昨今の情勢であります。ソ連崩壊に端を発した民族紛争の嵐の吹く中、西側の国々も多かれ少なかれ、その影響を受け、各国の政治情勢は極めて不安定になってきております。我国にもその風が及び、四十年近く続いた自民党の一党支配体制が崩壊し、多党連立内閣が成立、正に、歴史的転換点に、我々は立っているわけです。日本人が、長い間信奉してきた物質万能の経済至上主義が陰りをみせてきた今、人が最も信ずるものは何か、それは、心の平安ではないでしょうか。心、即ち、文化です。こういう世相だからこそ、文化行政に求められるものは大であります。

〝文化で飯は食えない〟とは良く言われることですが、事実、文化を大きく掲げると、選挙で票は減るというのが通説であります。この点に関して、私は、かなり異論を持っています。文化行政が失敗する大きな原因は、住民の方々の生活実感と遊離してしまい、文化という机上の理想像だけが一人歩きをしてしまうからです。常に住民とのコミュニケーションを図りながら施策が成されるべきです。

さらに、文化と生活実感や経済的価値をうまく連動させることが大切です。文化行政の推進が、文化だけにとどまらず、住民の生活全般に良い波及効果をもたらすということが大事です。文化が町のイメージアップに繋がり、町民の心をイキイキとさせ、人々が、自信を持って生活していただけるようになること、結果として、沢山の町外の人達に町を訪れていただき、町が活況を呈するようになる。こういう状況が理想的といえます。

そして、町民の方々の心の世界が広がり、子供達の情操教育に、何等かのプラスになれば、望外の幸せと言えます。

町の躍進を目指す西川町長

今後の具体的施策にちょっと触れますと、「緑と彫刻のある町づくりは、今後も継続発展させてゆきます。何体かのブロンズ作成と、公園整備を図り、小さな美術館を是非建設したいと考えております。願わくば、県立美術館の分館というような形で実現出来たら素晴らしいことなのですが。

さらに、文化センターを拠点とした文化発信活動の充実を図りたいと考えております。今後、積極的に県立劇場とも連携をとり、演奏会、講演会等を少しでも多く開催し、町民のコミュニケーションの場として活用していただきたいと思っています。文化センター、グリーンゲイトを拠点とした、若い人達の交流の輪が広がり、それが、今後、町づくり運動の大きな母体となっていってくれることを願っております。

一言

平国合串エゴシ地区神田ジンデの海を見下す小高い山の中腹に、景行天皇が腰をかけられたという「神石」がある。地元では「この石に登ったら腹が痛くなる」という。

平国には景行天皇を祀る天子宮さんがあり、津奈木の海岸には泊という文字のつく地名が沢山あることもあって神石に景行天皇伝説が生まれたものと思われる。

そんな尊い石にもかかわらず、何百年もの間、雨曝しのままだったが、平成二年十一月、誰言うこととなくこの神石に屋根を作ってあげようと話がまとまったのである。そして屋根ばかりでなく参道もコンクリートで固められ、たやすくお詣りができるようになった。今では朔日、十五日には、夫婦共ども家族の健康を祈って参拝するようになったという。

各地区にあるお宮の祭りが内祭りになったり、境内の掃除もなおざりで、老人まかせの状況にある。

子ども達にお宮を大切にする心がすたれてきた今日、神様だけでなく、ご先祖の供養にしても、日頃から手を合わせる習慣をつけさせるよい手本を見せてくれた、近頃すがすがしい話ではある。

（平野記）

山の上のプール
歓喜の水しぶき

平国小学校（山の上の学校）に子供達の願いであったプールが出来ました。

これまで海で泳いでいた子供達が安全なプールで、水しぶきをあげて泳ぐことが出来るのです。

どの子もまっ黒になって楽しそうに泳いでおりました。

町民体育祭

内野地区野球大会初優勝

真夏の熱戦
競舟大会は大泊地区の連続優勝

去る八月十三日から十五日までの三日間、毎年恒例の町民体育祭野球大会、競舟大会が開催されました。

野球大会は総合グラウンドで、Aコートは鶴野教育長、Cコートは西川町長の始球式でプレーボール。町長も選手として参加。町長の二塁打がでるなど、きびきびしたすばらしい試合が続出、決勝戦は倉谷と内野が対戦し、内野の初優勝でした。

また、競舟大会は大泊港で開催され、こちらも大変盛りあがり、大泊、平国下、内野の同点決勝で大泊の連続優勝となりました。

今年の大会は野球、競舟とも内野地区の活躍が特に目立った大会でした。

○野球大会　優勝・内野、二位・倉谷、三位・平国上、川内

○競舟大会　優勝・大泊、二位・平国下、三位・内野

皆さん、ご苦労さまでした。

図書寄贈

水俣保養院長、松永博喜さんから次の図書を寄贈頂きました。

寄贈図書名（瞑想夢人）

○おもな項目

第一章　春の章

我が心の師・うたせ湯

第二章　夏の章

予感…そして・私の中の魔物

第三章　秋の章

自己実現への道・悲しき隣人たちへ

（以下省略）

平国六方踊りを伝承

平国小5・6年生全員参加

熱心に練習に取組む子供達

子どもたちの地域における社会参加活動の促進を通じて、現在の青少年育成問題における基本的事項である社会性の欠如を是正し、社会性に満ちた活力ある青少年を育成し、また、地域に根ざした社会活動のなかで、ふるさとへの愛郷心を育むとともに子どもたちの活動を媒体として、ぬくもりのある地域コミュニティーの再生を図ることを目的として、平国六方踊りを永く保存伝承するため、今年度から平国小学校の5・6年生の子どもたちが平国六方踊り保存会の皆さん方のご協力で、現在夏休みを利用して、熱い体育館で一生懸命練習にはげんでおります。

十一月に実施される平国小の大収穫祭での発表が楽しみです。

婦人会ビーチバレー大会にハッスル！

七月十一日、夜七時より、連合婦人会主催による、「交通安全母の会杯ビーチバレーボール大会」が、BG体育館で開催されました。

二十代から五十代迄のバラエティーに富んだ？選手達と、大応援団も加わり、二百名近くの会員が楽しい汗を流しました。

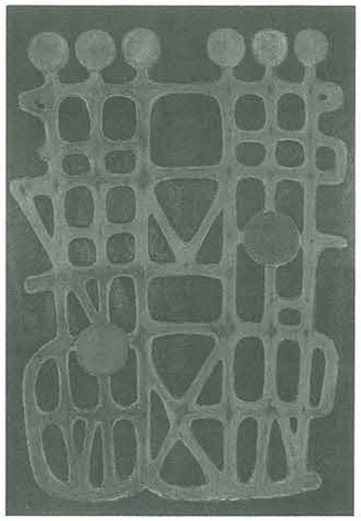
会員相互の親睦を図ると共に、交通安全の大切さを改めて考えていただきました。平国下チームが優勝し、和気あいあいの一日でした。

（西川記）

油彩

「ガラスの街」1970

境野一之 作



昼間のビジネス街の喧噪は、まるっきり嘘のように退いていったよ。その喧噪の主となる人々の群れは、そっくりそのまま、盛り場へと流れていったよ。

ビジネス街に残る人々のぬくもりは、しだいに弱まり、冷たくなっていくよ。明日の朝が来るまで、ガラスの街は、眠るよ。ひっそりと眠るよ。

庁舎美術館（49）

B&G沖縄海洋センターでの研修に参加して

丸山 恭徳

7月20日より3ヶ月間、沖縄県本部町でB&G財団の研修に参加して来ました。研修の内容は海洋性スポーツ（カヌー・ヨット）を中心にレクリエーションや陸上スポーツ、運動生理学について学んで来ました。全国各地から33名の研修生が集まり、年齢層も42才から19才までと幅広く、とても厳しい3ヶ月間でしたが、終了してみると自分にとってとても有意義な3ヶ月間だったと思います。

この研修に参加して、33名の仲間と朝から晩まで3ヶ月間過した訳ですが、あらためて故郷の良さ仲間の大事さを再認識した3ヶ月間でした。この研修で学んだことを生かせるように頑張りますので町民の皆様よろしくお願いします。

ヨット訓練の様子

高齢者と子どもたちとのふれあい「伝承教室」を開く

千代、津奈木地区公民館研修会が七月三十日、倉谷公民館で行われ、伝承教室が開催された。両地区の公民館関係リーダーの方々の参加の下に、倉谷地区の高齢者と子どもたちとのふれあいの場がもたれた。十五名の子どもたちに三十名の老人クラブの方々が昔の遊具作りを指導され、男子は竹トンボ、水鉄砲、女子はお手玉作りに取り組んだ。

子どもたちはうまく出来た時は大変喜んでいた。また、元区長の林林真さんの「昔の遊びについて」のお話を聞いた。

作り方の説明に聞き入る子どもたち

童話発表会

二年連続、県大会に出場

先日、本町の小学生十二名による童話発表会が行われ、練習の成果を披露した。発表の態度、話術など向上のあとが見られ、津奈木小の竹永あかねさん、古杉将光君赤崎小の岩崎平君の三人が郡市大会に出場した。八月二日の郡市大会で古杉将光君は優秀な成績を収め、堂々県大会に出場することになった。本町では二年連続の快挙である。県大会での健斗を祈る。

本町発表会の出場者

学校だより

赤崎小

赤崎小学校は、昨年度より「健康教育」の指定をうけ、児童の心と身体の健全育成に努力しています。その一環として七月より海の学校という地の利を生かしてBGよりローボートをお借りし、ボート乗りの練習に励んでいます。

一年から六年までのたて割りの六班で練習していますが、これこそ全員心をひとつにし全力を出してこがないとまっすぐには進みません。

九月の全校ボート競技大会を楽しみにしているところです

読書感想文

「小判草を読んで」

赤崎小6年　谷　由布

この本を読んで、とてもおもしろいと思いました。この話は、小判草がなぜこの名でよばれるようになったのかを説明しています。登場人物は主に弥七とおかるときつねが化けた女の人です。弥七は金だけをたよりにしている男で、お金を使うまいと雨水を井戸にためたりしていたほどです。しかし、おかると夫婦になってからは、もっとひどくなりました。例えば、井戸の水で弥七が顔を洗おうとすると、おかるが「野良へいくのだから小川の水で洗え。」という具合です。ですから、この夫婦は良く言うと節約家だし、悪く言うとけちんぼということになります。二人は、お客さんがきても、お金をもっている人にだけは愛想よくしているのですが、最後には、その性格がたたって、きつねに、にせの小判でだまされ、くやしがるはめになりました。にせの小判というのは、小判そっくりの草のことです。弥七がきつねにだまされた話を聞いた村人たちは、それからその草のことを小判草とよぶようになりました。

きつねは、弥七とおかるが欲ばりだということを知っていて、この二人なら、小判草でだませると考え、二人をだましたのだと思います。

人は、物に目がくらむと物事の判断が、できなくなるのだなあと私は思いました。

郡公民館研修会 貴重な事例発表を

七月二十日、つなぎ文化センターで芦北郡公民館研修会が行われ、公民館関係者約一〇〇名が一堂に会し、生涯学習推進に果たす公民館の在り方について研修を深めた。

先づ、甲佐町公民館長の清村　守先生の「自治公民館について」の講演があった。その要旨は大体次の通りである。

最近、子どもとの対話が少くなり、親の権威が落ちている。二十一世紀にむけて教育の基本的な在り方を検討すべきである。甲佐町には公民館が五〇あり、モデル公民館として校区に一館づつ、モデル集落を二ヶ所、五集落を指定地区として活動を行っている。

甲佐町では、生涯学習の理念に基づき町民の理解と協力のもとに話し合い活動を基盤として参加と連帯による希望に満ちた公民館活動をめざし、特に、あいさつ運動の推進、時間励行、地域福祉活動の推進等を努力目標としているとのことである。

次に、各町よりの事例発表に移った。芦北町の田中末喜氏は「助け合い、励まし合い」で地区民が助け合って活動している様子を発表し、うまくいった時の喜びは何とも云えない程、満足感で一杯である。あたたかい心の通う地域にしたいと意欲的である。

事例発表をする野崎貞行さん

津奈木町の野崎貞行氏は「郷土芸能の保存活動を通した地域づくり」で昔から平国地区に伝わっている六方踊りの復活にかける地区民の情熱と協力の様子を熱っぽく語りかけた。この協力体制を今後の地域の活性化につなげて行きたいと意気盛んである。

また、田浦町の田浦末男氏は「ふれあい公民館をめざして」で地区の方々の協力に対し、常に感謝の心をもって活気に満ちた事業を行っているとユーモアを交えながら語った。

三人とも夫々地域づくりに努力している貴重な実践報告をして、聴衆の感銘をよんだ。

私の生きがい

谷口 秀人

「年をとることにはコツはいらないが、年寄りで生き続けるにはコツがいる。このコツこそ、まさに生きがいである——」

よく聞かされる言葉ではあるが、古稀を過ぎた今日この頃では、まさにその通りだとつくづく実感させられる昨今である。

早いもので、一切の勤めを止めてからこの九月で、まる三年になるところだが、これまで、久しぶりに知人などに会うと必ずといっていいほど「今、何んばしよんなっとですか」という質問が飛んでくる。勤めていた時には一度も耳にしなかった質問だが、私の場合全く答えようがなくて、閉口している。恰好よく「今、趣味で釣りに熱中しよっとですたい」とか、「今趣味で、絵画教室で絵の練習ばしよっとですたい」とか言えるなら、それが一番聞いた人にも納得してもらえるし、安心もしてもらえていいのだが、今の私の実態とは全くほど遠く、とてもそんなことを言えた義理ではない。

家には父母から譲り受けた少しばかりの菜園畑とみかん畑とがあるが、実はそれらを雑草から守るのに精一ぱいといったところが本音である。雑草は強い。ほんとに強い。刈っても、払っても、またすぐに青い葉を繁らしている。しかし額に汗しながら草刈機で除草した後のきれいになった園を見る時、また、小さなカルチで耕運した後の畑を見る時、今までのキツサも一ぺんに吹っ飛び、ほんとに気持ちがいいものである。

また庭木の剪定にしても、自分がしたというだけで、どの職人さんがしてくれた時よりもよく出来たと、自画自賛して喜んでいる。「これだけは作りきらん」と父が敬遠していた西瓜つくりにも挑戦してみたが、去年今年とそれなりに頭大の西瓜を畑に見付けた時は、それこそ鬼の首でもとったようなうれしさを覚えたものである。

これというのも私の場合、農家の真ん中にいながら、今まで一度も責任をもって作物つくりという農作業にタッチしなかった、その反動から、今初めて農作業の喜びを知った、ということかも知れない。

いよ〳〵これから実りの秋九月。今まで通り病院とは仲良くおつきあいをしながら、何事も「できたしこたい」という気持ちで、朝夕の仔犬の散歩と土いじりに汗を流したいものだと思っている。

短歌

宮崎 優選

代掻を終えし水田にうつりいる紫陽花の藍遠空の青　野田浦子

梅雨明けの雨なおはげし枕辺に雷近く轟きわたる　野田浦子

老い初めてふたたび農を荷なう身の抵抗もなく地下足袋を履く　白浜美和子

借地料滞納五年の帳消しを条件にして荒水田戻りぬ　寺本ツルヲ

黒板に父の日記し君逝きて五っ年廻り父の日近し　寺本ツルヲ

豪雨の中霊柩車にて連れ給いし姑の命日雨しきり降る　白浜美和子

おびさの梅雨の晴れ間の昼さがり坂よりふきくる風は優しく　福田八重子

妹の送りしキルトの縫上げを降り続く梅雨に針進むなり　福田八重子

ドクダミの白き花咲く道の辺につめば手元につよき香ただよう　西滋子

手を休め耳をすませて腰おろしウグイス鳴く音梅林に聞く　柳迫いづも

固唾のみ地震の惨禍見つめおり呻きにも似し太き息つく　西滋子

幾種類もの薬を仕分け飲む日にて老い初めし吾の休息ながし　西滋子

九拾年よくも生きたり顧みれば悪戦苦闘の吾の足跡　西滋子

幼孫が筆ふとぶとと書きし字を部屋にかかげて明け暮れ見ている　島井保

春先に紫紺の極みクレマチヌ見入れば吾は戦さ場青春　島井保

矢城山やまの頂きおりおりに見え隠れする霧たちこめる　宮崎優

「一口メモ」　短歌とは、人間の自己表現と、美の創造のための営爲の言葉芸術の一領域の詩型の一つで、三十一文字に短縮された文の中に詩の心が表現される。

肥後狂句

やっぱり　五輪選手はちがうばい
やっぱり　彼も袖下もろとった
ゴルフ熱　日本中を吹きまくる
ゴルフ熱　金持ちどんの良か遊び　雲波

やっぱりあん人たちにだまされた
やっぱり　落選すると思とった
ゴルフ熱　家を出た後おんな熱
ゴルフ熱　いつになったら下がるどか　神無月

やっぱり　よう似とらすと思とった
やっぱり　親ちゅうもんは有難か
ゴルフ熱　腰の曲った人もおる。
ゴルフ熱　よかしこ銭のかかります　万葉

やっぱり　育ちの良さはあらそえん
ゴルフ熱　付き合ちゅうて出て行かす　七本松

〔次笠〕秋の空、頭の痛か
一笠二句づつ、十月十一日まで津奈木町岩城一五八八―二、つなぎ文化センターへ投句下さい。